

# 佐藤 優

作家、元外務省主任分析官

実践「悩まない」練習  
有名僧侶。  
導き人の教え

## 不愉快、苦痛とのうづな付き合い方とは

私は、母がプロテスタントのキリスト教徒だった関係で、子供の頃からよく教会に連れていかれた。一四歳のときに熾烈な沖縄戦に遭遇し、軍属として、陸軍第六二師団（通称「石部隊」）と行動をとるもにした母は、戦争末期に陸軍の下士官から自決用に手榴弾を二個渡された。

沖縄本島高部、摩文仁の浜辺にある自然壕に隠れているとき、米兵に発見された。「手を挙げて出てきなさい」という投降勧告を受けて、母は自決しようと手榴弾の安全ピンを抜いた。信管を壁に叩きつけば、五秒足らずで手榴弾が爆発し、壕の中にいた一七人は全員死ぬはずだった。母が二、三秒躊躇したとき、隣にいたひげ面の伍長が一死ぬのは捕虜になってからもできる」と母をいさめて両手を挙げた。そこで、母は命拾いした。

戦争に敗北し、命より大切だと教えら

わたしは  
自分の望む  
善は行わず、  
望まない悪を  
行っている。

新約聖書「ローマの信徒への手紙」7章9節 新英訳

れた日本国家の統治が沖縄には及ばなくなつてしまった。その時期に母はキリスト教に触れ、洗礼を受けた。母自身は神を信じていたが、自分の信仰を他人に勧めることは一切しなかった。母は私が子供の頃から、「神様はいると思う。それ

だから、あの沖縄戦でもお母さんは弾に当たらなかった。この命は神様から与えられているので、大切にしなければならぬ」と戦争を通じて実感した。人間にとって大切なのは、自分の命や能力をイエス様が行ったように他人のために使うことだ。もちろん人間は神様じゃないから、完全にはなれない。しかし、ほんの少しだけでもイエス様の生き方を見習って、他人のためになる人生を送ってほしい」という話をよくしていた。

母からの刷り込みで、私自身も神がいるのは当然のことだと思っていた。中学生の私が、洗礼を受けたいと言いつつ、母と牧師から「一時の衝動で洗礼を受けるのはよくない。ある程度人生の経験を積んで、心底キリスト教徒として生きていく」という気持ちが固まってから考えればよい」とたしなめられた。この牧師、

新井善弘先生は元厚生官僚で、三十代で洗礼を受けた。自分が本当にやるべきことは牧師になることだという召命観を持ち、中途退職して神学校に入学した。

新井先生は、私の洗礼を押しとどめたことで同僚たちから批判されたそうだが、しかし、今振り返ると、この判断は正しかった。この時点では、私はキリスト教よりも新井先生の人格に魅了されていたからだ。そのため、高校二年生のときに新井先生が病死した後、私は教会に行かなくなってしまった。もしあのとき洗礼を受けていれば、これが私の信仰にとって大きな挫折になっていたと思う。

教会から離れた同時期に、私はマルクス主義に惹きつけられた。特に『資本論』の精緻な論理が私の心を捉えた。これは埼玉県立浦和高校時代に知り合った鎌倉孝夫先生（当時、埼玉大学助教授）によると



**masaru sato**

1960年、東京都生まれ。  
 85年、同志社大学大学院神学  
 研究科修士、外務省入省。  
 在露日本国大使館等を経て  
 95年、国際情報局分析第一課。  
 2002年、背任及び  
 偽計業務妨害容疑で逮捕。  
 09年、執行猶予付き有罪確定、  
 外務省を失職。著書に  
 『国家の罫』『私のマルクス』  
 『はじめての宗教論  
 (右・左巻)』『新約聖書(Ⅰ・Ⅱ)』  
 (文春新書、解説のみ)ほか多数。

ころが大きい。鎌倉先生は、『資本論』  
 を社会主義革命のためのイデオロギ―書  
 としてではなく、資本主義社会の内在的  
 論理を解き明かした論理を抽出するテキ  
 ストとして読むことを教えてくれた。

『資本論』を勉強するうちに、子供の頃  
 から教会で教えられてきた、新約聖書ロ  
 ーマの信徒への手紙に記されたパウロ  
 の以下の言葉が蘇ってきた。

「わたしは、自分のしていることが分か  
 りません。自分が望むことは実行せず、

かえって憎んでいることをするからです。  
 もし、望まないことを行っているとすれ  
 ば、律法を善いものとして認めているわ  
 けになります。そして、そういうことを  
 行っているのは、もはやわたしではなく、

わたしの中に住んでいる罪なのです。わ  
 たしは、自分の内には、つまりわたしの  
 肉には、善が住んでいないことを知って  
 います。善をなそうという意志はありま  
 すが、それを実行できないからです。わ  
 たしは自分の望む善は行わず、望まない  
 悪を行っている。もし、わたしが望まな  
 いことをしているとすれば、それをして  
 いるのは、もはやわたしではなく、わた  
 しの中に住んでいる罪なのです。」(七章  
 一五―二〇節、以下すべて新共同訳)

現実の社会には、労働問題や社会問題  
 がある。また、世界では戦争が絶えな  
 くない。キリスト教徒は、主観的には  
 善をなそうとしているが、社会構造にあ  
 る悪を見ようとしな。本当に善を行う  
 ためには、神にすがるよりも、マルクス  
 主義理論に基づいて社会構造を分析し、  
 革命を目指すことが正しいように思えた。

**信仰が揺らいだ  
 ことは一度もない**

私は高校の勉強が面白くなくなり、マ  
 ルクス主義や哲学に関する本を読み漁る  
 ようになった。今振り返ると、私には、  
 当座の受験勉強から逃げ出したいという  
 心理と社会問題に関する強い関心が混在  
 していた。かなり難しい生徒だったと思  
 うが、高校で倫理社会を教えていた堀江  
 六郎先生が私の問題意識を正面から受け  
 止め、熱心に指導をしてくださった。

カトリック教徒で、東京大学文学部と  
 大学院で倫理学を専攻した教養人だった  
 堀江先生は、「大学入試の準備も兼ね、  
 英語の思想書を読みましよう」と、米国の  
神学者ラインホルド・ニーバーの『光  
 の子と闇の子』(The Children of Light  
 and the Children of Darkness)をテキス  
 トに指定した。高校生にとつてかなり手  
 応えのある英文だったが、堀江先生は丁  
 寧な英文の解析とともに、哲学や神学の  
 専門語についてもわかりやすく解説して  
 くださった。講義の中で、今でも鮮明に  
 記憶に残っているのが以下の内容だ。

「ニーバーは、新約聖書『ルカによる福

「草書」一六章八節に書かれた〈この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子よりも賢くふるまっている〉というイエスの言葉を念頭に置いています。

ナチスが闇の子、つまりこの世の子であるのに対して、民主主義者も共産主義者も光の子です。社会には構造的な悪が存在する。悪に対抗するためには力が必要ですが、力には常に自己絶対化の誘惑がつきまとう。民主主義者も共産主義者も、『自分が絶対に正しい』と思想も行動も硬直していく傾向があります。

これに対し、闇の子は『自分が絶対正しい』とは思っていません。正邪、善悪などの価値観に闇の子は無関心です。ヒトラーはシニカルでニヒルですから、力にだけ依存してどのような残酷な行動も躊躇することなく取ることができました。

光の子に欠けているのは、人間の罪に対する認識です。パウロが述べている『わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている』という根源的な反省を欠いているのです。人間の罪について無自覚な社会改革の思想は、必ず悪政をもたらします」

知恵が深まれば  
悩みも深まり  
知識が増せば  
痛みも増す

旧約聖書「コヘレトの言葉」一章18節 新共同訳



拘留所内の佐藤氏に差し入れられた聖書(写真左)。「閲読許可証」の子付き「閲読許可証」のラベルが貼られている(同右)。ラベルには独房のある建物の区分(シホ舎=新北舎2階)、氏名、閲読期限が記されている。独房での書籍の閲読期間は原則として1カ月だが、聖書は宗教学のため無期限。42ページのアジア語の聖書。真

この言葉が、徐々に私の考えに影響を与えた。社会問題に対するキリスト教徒の無自覚も罪だが、同時に、人間を絶対化しようとするマルクス主義者の発想にも罪があるように思えてきた。

そこで、キリスト教とマルクス主義の関係について本気で勉強したくなった。最初は文学部哲学科で宗教批判を研究したいと思っていたが、一浪中にキリスト教神学を真剣に勉強したくなり、一九七

# 受けるよりは 与える方が 幸いである

新約聖書「使徒言行録」20章35節、新共同訳

九年四月、同志社大学神学部に入學した。

神学部は本当に自由な雰囲気だった。神学を勉強して約半年で、マルクスが批判している神は、人間がみずからの願望にあわせてつくった偶像にすぎず、キリスト教の神とまったく異なることを知った。七九年十二月三日のクリスマス礼拝のときに洗礼を受けた。当時、私は一九歳だった。

あれから三年経つが、信仰が揺らいだことは一度もない。私が信仰を持ったのではなく、神に私が捉えられ、身動きが取れなくなってしまうのだ。人生で様々な問題に遭遇したとき、私は神のためにはどのような選択をすればよいかと無意識のうちに考えるようになった。

こういうものの考え方は、学生時代に身についた。恐らく、よき教師、学生との出会いが、知らず知らずのうちに私の心の鑄型をつくつたのだと思う。神学は、知恵や知識がつけばそれを人生や仕事に応用できる法律学、経済学、工学などと違って、旧約聖書「コヘレトの言葉」一章一八節に記されているように「知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛

みも増す」という性格を持っていることを、神学教師たちから知らず知らずのうちに叩き込まれた。後に外交官になって、北方領土をめぐる秘密交渉やインテリジェンスの仕事に従事して、知れば知るほど悩みが深くなり、心が痛くなるようなことが増えたが、仕事のプレッシャーに潰されなかつたのは、「コヘレトの言葉」がいつも頭の片隅にあつたからだ。

神学教師は、人当たりは柔らかないが意思の強い人が多かつた。学者としても優秀だったが、それよりも、自分が受けることより他人に与えるという神学教師の人生観から私は強い影響を受けた。これは新約聖書「使徒言行録」で、パウロが紹介したイエスの言葉に基づく。

〈わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼつたことはありません。ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなたがたもこのように働いて病弱者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すように、わたしはいつも身をもつて示してきました。〉(二〇章三十三―三五節)

## 苦しくなかつた 拘留所での「独房生活」

信仰は、決断によつてつかみ取れるものではない。これも神学教師たちから教わつたことだ。人間と神は質的に異なるので、人間の意思によつて信仰を持つという発想したいが傲慢だ。

人間と質的に異なる全能の神は、人間を救うためにこの世に神のひとり子であるイエス・キリストを派遣した。イエス・キリストとは、イエスが名でキリストが姓ということではない。イエスは、当時のパレスチナによくあった男性名だ。これに対して、キリストとは「油を注がれた者」という意味だ。「油を注がれた者」とは、救済主を意味する。

イエス・キリストは真の神であり、真の人だ。罪を持たないという点を除いては、食事をし、酒も飲み、排泄し、睡眠を取る完全な人間である。キリスト教とは、「イエスという男が、罪を持った人間の救済主キリストである」と信じる宗教なのだ。この信仰は、人間の努力によってではなく、神の側からの圧倒的な力で人間に迫ってくる。その意味でキリスト教は、仏教で言うならば浄土宗や浄土真宗のような他方本願の宗教なのである。

信仰はつかみ取るものではなく、うつる（感染する）ものだ。イエスが官憲に逮捕されたとき、弟子たちは怖くなって全員逃げ出した。しかし、十字架にかけられて処刑されたイエスが復活した後は、弟子たちは殉教の死を恐れない強固な信仰を持つようになった。イエスは「受けるよりは与える方が幸いである」という生き方を徹底した。そして、最後に他の人間のために命まで与えたのである。

イエスが生きた時代は、哲学という素朴実存論が人間の思考を支配していた。夢で見ることも、昏間に現実で起きたことと同じ重みを持つ。処刑されたイエス

と夢の中で出会い、話をしても、生きているイエスと会ったのと同じように受け止められる。それだから復活を超自然現象ととらえる必要はない。イエスの生き方が、弟子たちにうつったのである。同志社の神学教師たちにも、そして私にも、イエスや弟子たちの「受けるよりは与える方が幸いである」という生き方がうつっていたのである。

こういう信仰は、ソ連崩壊の激動期に外交官として八七年から九五年に私がモスクワに勤務したときに役に立った。外



ロシア語、中国語など旧共産圏の言語で書かれた聖書（写真）。国内にひそかに持ち込みに際は一見してそれとわからぬよう、背や表紙にタイトルの記されていない。無神論政策をとるマルクス主義では「宗教は人民の阿片（アヘン）である」とされているため、旧ソビエト連邦などでは、教会や信徒の投獄がはげしく行われていた。

交においては、正確な秘密情報を入手することが死活的に重要だ。また、日本政府にとって有利な状況をつくり出すためにロシアの要人に働きかけなくてはならない。ロシアで人間観察を続けているうちに、優れた政治エリートは、「受けるよりは与える方が幸いである」という原則で行動していることに気付いた。日本の国會議員や官僚についても同様だ。

九五年に帰国し、インテリジェンス業務に従事するようになったが、どの国でも、優れたインテリジェンス・オフィサーは、「受けるよりは与える方が幸いである」に従って行動していた。新約聖書「マタイによる福音書」四章一九節によれば、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言って弟子たちを獲得した。キリスト教の強さは、信仰で結びついた本当の仲間をつくる力があることだ。キリスト教徒でない人、宗教を信じない人にもイエスが説いた人心掌握術は役に立つ。要は打算でなく、捨て身で他人のために尽くす人が、究極的なところで信頼を得るのである。限られた人生の中で、自分が他者から「受けること」でなく、他者に自分が何かを「与える」ことができないかと考えることにより、この世の中が異なってみえるようになることを、私は実感している。

二〇〇二年五月一四日、鈴木宗男事件に連座して、私は東京地方検察庁特別捜査部に逮捕された。東京拘留所の独房に五二日間拘留された。拘留期間中は接見等禁止措置がつけられ、弁護士以外と

の面会、文通、さらに新聞購読が認められなかった。独房生活は、決して愉快ではなかったが、耐えられないほど苦しい経験ではなかった。

獄中では、先の「使徒言行録」と旧約聖書「ヨブ記」を繰り返し読んだ。この地上で起きる苦難は、すべて神によつて与えられた試練である。この苦難を耐えれば、神は必ず人間に救いの手を差し伸べてくれるというのが預言者ヨブの確信だった。「人生は短く苦しみは絶えない」（四章一節）というヨブの言葉を噛みしめながら、学生時代の神学教師や友人たちから学んだことや、崩壊期のソ連で政争に巻き込まれたときの政治家の立ち居振る舞いについて、記憶を整理し、私自身の生き方について考えた。他人を恨んだり、運命を嘆いたりするのではなく、この試練を正面から受け止め、イエス・キリストに倣って生きようと思った。

人生や仕事で深刻な悩みに直面したときに、虚心底懐に聖書を読めば、何か心を打つ表現がある。聖書の言葉はキリスト教徒だけでなく、他宗教の信者や宗教を信じていない人にも救いをもたらす根源的な力を備えている。 P

## 人生は短く 苦しみは 絶えない

旧約聖書「ヨブ記」14章1節、新共同訳